

第 5 回 SPARC Japan セミナー2013

「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来」

開会／概要説明

杉田 茂樹

(千葉大学附属図書館/DRF)

講演要旨

本セミナーへの導入として、我が国におけるオープンアクセスの概況について概観する。



杉田 茂樹

デジタルリポジトリ連合運営委員。機関リポジトリ推進委員会委員。

私はこの10年間ほど、大学図書館勤務で機関リポジトリの仕事をしてきましたので、グリーンオープンアクセスを中心に、これまで大学でセルフアーカイビングに関してどのように取り組んできたかというお話をさせていただきたいと思います。

「オープンアクセス」との出会い

私たちがオープンアクセスという言葉をはっきり意識して聞いたのは、10年ぐらい前、横浜で毎年開催されている図書館総合展に、今も活発に活動しているスティーブン・ハーナッド氏が来られたときです。彼は、オープンアクセスの特にグリーン方面に、その当時に既に10～20年携わってきた人です。図書館総合展の聴衆は図書館の人や出版関係の人だったのですが、そこでスティーブン・ハーナッドが私たちに言っていたのは、出版社側としても、研究者一人一人が自分の意思で自分の論文を自らウェブ公開することを許している出版社は多く、これからどんどんそういうことを

進めていくべきであろうと。問題は、研究者の側に、キーストロックという言い方をしていましたが、自分の書いた論文を雑誌で出版することと併せて、自分の手で、幾つかのコンピューター上の作業はかかるけれども、大学のウェブサイトや自分のホームページで公開すればいいということでした。これを聞いて、大学側としてもそういう場を用意しようと、2004～2005年ごろから、機関リポジトリが国内でもぼつぼつと増えてきました。

私は当時、北海道大学に勤めており、そこで機関リポジトリを作る仕事に携わりました。そこで、キーストロックだけではないなと思ったのは、先生方にオープンアクセスの考え方などをお話しに行く機会があったのですが、そのころよく「電子ジャーナルって、お金がかかっているの？」と聞かれることがありました。図書館はずっと前から電子ジャーナルのお金の問題で頭の中がいっぱいで、一つはそれを乗り越えるため、せっかく電子ジャーナルに載せた論文をより多くの人

に見てもらうためのオープンアクセスなのですが、その趣旨や考え方を分かっていたくために、もっともっと現状について先生方と認識を共有する必要がありました。この10年間、私の印象では、先生方の理解を高め、オープンアクセスについて、背景も含めてより分かってもらえるように、いろいろなチャンネルを使って大学図書館と研究者との対話をできるだけ増やして、セルフアーカイビングを促進していこうという活動をしてきました。

日本の機関リポジトリの現状と展望

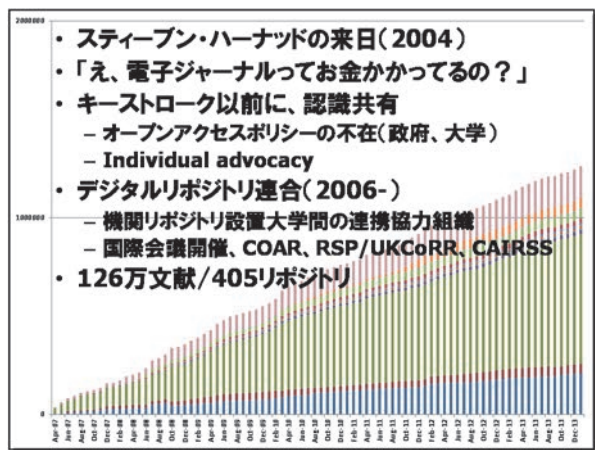
図1の後ろにあるグラフが現在の状況で、日本では400の大学が機関リポジトリを持っていて、そこに126万の文献が入っています。色分けをしています、一番下の青色が、学術雑誌に発表された論文をセルフアーカイブしたもの、2番目の赤色が学位論文です。3番目の最も多い緑色が、大学が発行する紀要を機関リポジトリを通じて電子ジャーナル化しているもの。他に科学データや学会での発表資料など、いろいろなタイプのものが幾らかあります。126万文献というのは相当なもので、各大学で3,000程度の文献を世界にオープンにしているというのが現状です。

その中で、国内の機関リポジトリを設置している多くの大学が2006年からデジタルリポジトリ連合(DRF)をつくり、どうやっていけばいいか、何が効き目があるのかということを情報共有しながらやってきました。ここでは、国内の情報共有だけでなく、海

外、国際的なリポジトリマネージャーの連携組織であるCOAR、イギリスのリポジトリマネージャーのコミュニティであるRSP/UKCoRR、オーストラリアのCAIRSSなどとも情報交換し、お互いに良いところを盗み合い、自分の大学の活動に適用し、発展を目指してきました。

126万文献とはいっても、これは過去の文献も含みますし、今、先生方が毎日書いている論文が全て機関リポジトリに収載されているとも言いきれないので、まだまだやることはたくさんあると考えています。今日のセミナーでもアジア各国の状況を聞くことができるということで、私たちも学べることを学んで、自分たちの活動に役立てていきたいと考えています。

仕事柄、グリーンオープンアクセスの話ばかりになってしまいましたが、今日はぜひゴールドオープンアクセス、オープンアクセスジャーナルの発展についても、たくさんの情報を受け取って帰りたいと考えています。



(図1)